

A08-016 バックステイツキスカルの回復技術

Recovery from Scull with Backstay

バックステイツキスカルでは、ステイの外側から乗り込むこともできる可能性があるが、艇のタイプによっては、強度不足や怪我の恐れから、現実に難しいこともある。

1 リガーステイと沈の回復

スイブ艇の場合は、漕手の逆サイドにはリガーが出ていないので、そちらから乗ることができる。しかしスカル艇では、沈から回復(水中からの再乗り込み)する際、リガータイプによっては、リガーステイが問題となる。

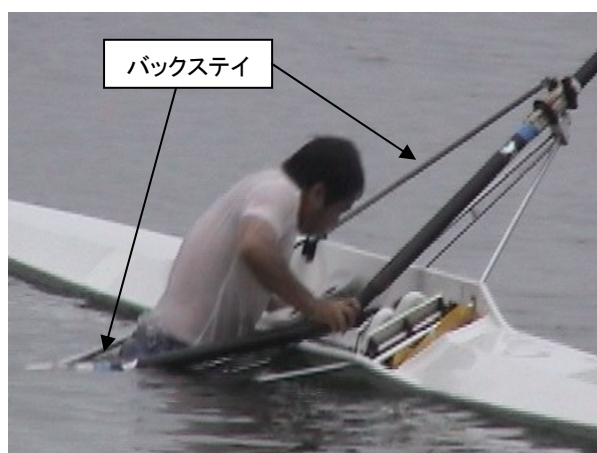
バックステイのないタイプは、比較的容易に回復できるが、バックステイ付のスカル艇では、乗り込みが難しい。

2 バックステイツキスカルでの回復実験

バックステイ付シングルスカルでの回復実験を試みた(2003年7月、太田川IBCの安全講習会)。(本来バックステイのないヤマハ1×にバックステイを仮設し、4名(経験年数は数年～約20年)が挑戦した。

2.1 バックステイの内側からの回復は無理

その結果、まず「バックステイの内側からの再乗艇はほとんど無理」であることが確認できた(4名とも失敗)。



バックステイ内側から乗り込みに挑戦
体を艇上に載せることはできるが…



脚をクリアできないまま再び落水。ステイ内側からは乗れそうにない。

2.2 バックステイの外側からの回復

バックステイの外側から、レールに向かってアプローチする方法を試してみた。この方法であれば、なんとか回復できることを確認した(4名中2名が成功、他の2名も、練習すればできるようになるだろうとの見込み)。



バックステイの外側から斜めに乗ることで成功

ただしその場合でも、フロントキャンバス側に結構負荷をかけてしまう。また波除の形状・構造など、艇によっては回復が困難なことも予想された。

艇の保全と漕手の安全を考えると、余裕がある状況では、回復させずそのまま救助を待つとか岸に寄せるなど、別の選択肢を検討するほうが良いだろう。



何とか回復できた。しかしフロントデッキにかなりの負荷!

3 補足:小物の危険に注意.

リガーの長さ調節のホースバンドやリガーボルトなどが、沈や回復行動の際、思わぬリスクとなり得る。怪我をしないよう、艇から鋭利な突起物がないかチェックしておこう。

□ホースクリップタイプのリガー調整・固定金具は、ペロが突き出していないように注意し、プラスチックテープなどを巻いておく。

□リガーボルトが、過度に突き出していないか点検する。突き出ている場合は、適切な長さのものに交換する。